マリンレスキュージャーナル

Vol 106 No 2
2014年 8月号

CONTENTS

01 MRJグラビア
平成26年度日本水難救済会名誉総裁表彰式典

05 特集 名誉総裁 憲仁親王妃久子殿下が
(公社)北海道海難防止・水難救済センターの
「全道大会」に御臨席等のため北海道にお成りになられました

10 連載 マリンレスキュー紀行
海の安全安心を支えるボランティアたちの群像
愛知県水難救済会 蒲郡救難所／師崎救難所

16 救難所のお膝元
ニッポン港グルメ食遊記【海上レストラン(愛知県海部郡飛島村)】

17 MRJ歴史探訪シリーズ第10回(最終回)
ボランティア精神の源を訪ねて ～琴陵宥常と御本宮造替～

21 青い羽根募金活動レポート2014
平成26年度青い羽根募金強調運動／青い羽根募金支援自動販売機の設置状況
／年賀寄附金配分を受け消防・排水ポンプを整備／広報・周知活動／使用実績

26 水難救済思想の普及活動レポート

29 マリンレスキューレポート
Part1 救難所NEWS 海難救助訓練ほか／新設救難所の紹介／海難救助活動報告
Part2 洋上救急NEWS 洋上救急活動報告／洋上救急慣熟訓練

41 MRJ互助会通信

43 MRJフォーラム 理事会、総会等の開催ほか

46 編集後記

表紙 ：愛知県水難救済会 蒲郡救難所

マリンレスキュー紀行

海の安全安心を支える ボランティアたちの群像

愛知県水難救済会 蒲郡救難所／師崎(もろざき)救難所

▲三河大島に向かって疾走する蒲郡救難所の救助船「ラスティ・サザン号」

海を愛し、命を守る。先人の想いを受け継ぎ、海を駆ける男たち。

取材協力：蒲郡救難所、師崎(もろざき)救難所

恵まれた条件のもと、多彩な表情を見せる愛知の海

日本のほぼ中央に位置する愛知県。南は太平洋に面し、残り三方を三重県・岐阜県・長野県・静岡県に囲まれる。太平洋側には渥美半島と知多半島が突出し、伊勢湾や三河湾を形づくりながら約594kmにも及ぶ長い海岸線を伸ばしている。気候は一年を通じて温和。特に渥美半島や知多半島南部は、黒潮の影響によって温暖な地域となっている。

伊勢湾と三河湾には、木曽川や矢作川、豊川などの河川から豊かな栄養が流れ込む。この2湾を擁する愛知県の海は、古くから国内有数の漁場として知られてきた。各河川の河口付近には発達した干潟が広がるほか、渥美半島の南側にある渥美外海には緩やかな大陸棚が連なって、多くの生き物を育んでいるのだ。こうした恵まれた地形を背景に、小型底びき網や船びき網、採貝、刺網といった沿岸漁業が盛んに行われ、国内漁獲量の50%以上を誇るアサリを始め、ガザミ類、シラス、イカナゴ、クルマエビなど多種多様な水産物が港に水揚げされている。ノリの名産地としても知られ、養殖が盛んに行われている。

また日本5大国際貿易港の1つ名古屋港を有する愛知県の海では、タンカーなどが活発に行き交う。マリンレジャーの人気エリアでもあり、モーターボートやヨット、水上オートバイが波間をゆく様子や、釣りに興じる人、波乗りを楽しむサーファーなどを各地で目にすることができる。

取材班は今回、この愛知の海を拠点にさまざまな立場から「海の安全と命を守る」活動を展開する人々のもとを訪れ、お話を伺った。

蒲郡救難所

▲蒲郡救難所の皆さん。愛知県水難救済会より支給された、揃いのTシャツを着て

佐奈田桂さんにより発足、救助活動を展開して約60年

蒲郡市は、渥美半島と知多半島に囲まれた三河湾に面する海辺の街だ。三河湾国定公園の代表的な名所・竹島や、三谷温泉を始め4つの温泉郷を有することなどから、県内屈指の観光地として知られる。県営の「海陽ヨットハーバー」が設置されていることからもうかがえるように、多くの人がマリンレジャーを楽しみに訪れるエリアでもある。三河湾内にある三河大島には、毎年7月1日～8月31日に海水浴場が開設され、モーターボートや水上オートバイ、この期間に運航される定期船で多くの人が島に向かう。

この蒲郡の海を拠点に活動を展開しているのが蒲郡救難所である。所員数は32名。船を所有し、釣りやクルージング、そしてそのフィールドである海をこよなく愛する人たちが集まっている。

「海での時間を楽しむ人は、みんな私たちの仲間。その精神をもとにこれまで海難救助活動を展開してきました」救難所長を務める佐奈田隆義さんは語る。

そう、この救難所、別名「三河湾伊勢湾海難救助隊」は約60年の活動実績を誇っているのだ。その経緯を振り返ると、昭和30年に故・佐奈田桂さんを隊長として結成された「蒲郡救助隊」が昭和47年に「三河湾伊勢湾平水区域沿岸警備隊」として組織組成され、三河湾伊勢湾海難救助隊と呼ばれるようになった。そして昭和53年、それまでの活動と並行して蒲郡救難所の看板を掲げたのである。特に、自らを「海人　萬灯庵悟空」と称した佐奈田桂さんの功績は類を見ないもので、その活動は新聞やテレビ番組で何度も取り上げられ、平成14年には600人を超える人命救助に携わったとして日本水難救済会初の名誉総裁章を個人受章した。

こうした海難救助活動に賛同する者は多く、三河湾伊勢湾海難救助隊の活動範囲は一時、愛知県を越え、隣接する静岡県や三重県、さらには石川県まで広がった。その後組織の細分化が進み、現在、隊はその名の通り愛知の海を拠点とし、蒲郡救難所としては蒲郡周辺の海で救難活動を行っている。

▲蒲郡駅前に設置されている、国際レース「アメリカズ・カップ」に参戦したニッポンチャレンジ・チームのヨット

風で戻れなくなった遊泳の高校生3名を救助

毎年夏、蒲郡救難所は大忙しの日々を送る。海水浴場の開設期間、三河大島の安全を担っているためだ。この時期は毎日と言っていいほど何かしら起こる、と副所長の福島雅弘さんは苦笑いする。

昨年8月21日に起きたのは、海水浴客の無謀な行動がきっかけとなった事例だった。14時35分頃、遊びに来ていた高校生の一群のうち3名が、海水浴場から沖へやや離れた小島に向かって泳ぎ始めた。小島は目に見える程度の距離にあり、本人たちは大事になると考えていなかったのだろう。しかし、小島からの帰りに予期せぬことが起こった。「この時、海上には西風が吹いていて、彼らは風に逆らうような形で進むことになった。どれだけ泳いでも三河大島にたどり着けない。さぞ慌てたろうと思います」事情を知る安藤雅章さんは言う。

一方、海水浴場にいた仲間たちは3名が戻ってこないことに不安を募らせ、福島さんら救助員が詰めていた警備室に駆け込んだ。そこで福島さんと佐奈田さん、鳥山美弘さんが鳥山さん所有の救助船「大天狗」（2.5トン）に乗り込み出動。ほどなく漂流する3名を発見した。

「疲れ切ってはいましたが、幸いにして命に別条はなかった。すぐに救助船に引き上げ、海水浴場に送り届けました」福島さんは事故を振り返った。「今回は、仲間が早く私たちに知らせてくれたことが功を奏したのだと思います。どんなに若く元気でも、海は陸上とは違う。波に逆らって泳ぐのはとても体力を使うし、遊泳では救命胴衣をつけることはまずないので体力が尽きれば命の保障はできません。彼らにとっては海の怖さを実感する経験になったのではないかと思います」

▲初代所長・佐奈田桂さんのご子息で、現在救難所長を務める佐奈田隆義さん

▲蒲郡救難所のムードメーカーで救助活動の出動件数も多い副所長、福島雅弘さん

地形変動に気づかず座礁したヨットを引き出す

三河大島ではプレジャーボートの事故も多い。「モーターボートの船外機プロペラに足をかけて負傷したり、機関故障を起こした水上オートバイが漂流したり、といった事案もありますが、やはり多いのがこの海域を理解していないことによる座礁です」佐奈田さんが語る。岩礁が多く、また台風などにより海底の状況が変わることもある。それまで航行できたところが危険な地点に変わることもよくあるそうだ。

平成25年9月7日に起こった事故は、まさにこの海域の特徴に起因するものだった。その日10時30分頃、福島さんと鳥山さん、そして横屋文博さんは三河大島の東岸の桟橋に救助船「大天狗」を係留しようと作業していた。その時、海上を走っていたヨットが急停止する様子を目撃した

▲穏やかな人柄で、多忙な救難所の活動を温かく支える横屋文博さん

▲三河大島で海の家を営み、周辺の状況を詳しく知る安藤雅章さん

▲海水浴場オープンを控えた三河大島。無人島だが、シーズンには人でにぎわう

▲島から海に向かって長く続く浅瀬

という。「大島の東岸から東に向かって、かなり長く浅瀬が続くポイントがあります。事故当時は台風の影響で地形が変わり、この浅瀬がさらに20mほど伸びていた。それを知らずに航行したので、キールを海底にめり込ませてしまったんです」救助に携わった横屋さんが説明してくれた。

居合わせた3名は大天狗を駆って早速救助に向かった。「キールががっちり浅瀬にはまり込んでいてヨットのエンジンだけでは脱出できず、立ち往生している状況でした。『大丈夫か？』と2名の乗員に声をかけたところ、救助してほしいと助けを求められたため、ロープを投げ渡してつないでもらい、二次遭難に気をつけながら救助船で引き出しました」この海域の地形をよく知っているとはいえ、救助船が座礁しないよう注意しながらの作業は注意力と時間が必要だった、と福島さんは事故を振り返った。

この海で、誰にも悲しい思いをさせない

蒲郡救難所では海難救助活動のほか、地域の小学生を対象に着衣泳を指導したり、海水浴場でパトロールを行ったりと、海を安全に使用してもらうための取り組みを展開している。ブレジャーボートについては救命胴衣着用が普及して命に関わる事故の発生率が低下した一方、海水浴客の意識はまだそれほど高くはない、と佐奈田さんは眉を寄せる。「特に気になるのが、親御さんの、子どもへの目が行き届かないケースが増えていること。『うちの子がいなくなった、探してほしい』と警備室を訪れてくることがよくあるのですが、陸上と海では危険度がまるで違います。ちょっとした油断が子どもの命を危険にさらすことがある、それを改めて認識してほしいと感じます」

海底が急に深くなったり潮の流れがあったりと、穏やかそうに見える海にもリスクが潜んでいる、と安藤さんは表情を引き締める。「私はいつも海にいるので、怖さを感じる機会も多い。自然を甘く見ている人を目にするとハラハラします」「海は多くの人にとって非日常の空間ですから、開放的な気分になることはよくわかります。けれど、危険な側面があるということを頭の片隅に置いてほしいですね」と横屋さんも言葉を添える。

どの海水浴場にも、エリアの特性を踏まえてつくられたルールがある。そこで安全に楽しむためにそれをしっかり守ってほしい、と福島さんは言う。「私たちはそのルールに則って注意や指導をしています。すべては命を守ることにつながっていると理解してもらえたらうれしいです」

つまるところ、ここで悲しい思いをする人を出したくない、ということなんです、と佐奈田さんは笑った。

約60年前、佐奈田桂さんという海をこよなく愛する人の想いから始まった蒲郡の海難救助活動。その情熱と優しさは着実にこの地に根づき、今も多くの人の命を守っていた。

▲干潮で取り残されたボート。持ち主に頼まれ、救助船で海へ引き出すことも多い

▲海水浴場オープン前の取材日も、海上には水上オートバイの姿があった

師崎救難所

▲日本水難救済会の真新しい旗を手にする師崎救難所のお二人

「助け合いの精神」が文化として浸透する漁業の街

知多半島の南端に位置する南知多町。古くから漁業が盛んに行われており、町内には6つの漁港がある。その1つ、半島突端にある師崎漁港は、新鮮な魚介類を始め地元でつくられた干物やつくだ煮、青果物まで幅広く並ぶ「師崎漁港朝市」が毎朝開かれる人気の観光スポットともなっている。この港を拠点に海難救助活動を行う「師崎救難所」が、今年5月13日に開設された。

「所員数は12名。発足したばかりですので、救助員の登録は師崎漁業協同組合の役職員が中心になっています。けれど、漁船や漁業者が事故に遭遇した時は、皆で一斉に救助に向かうことが古くからのこの地の文化。それはこれからも変わりません」と話すのは、師崎救難所の副所長を務める手島安也さん。

漁業者の事故は年に1、2回程度起こるとのこと。昨年1月19日にも、1本釣り漁業で海に出た漁業者が行方不明になる事案が発生した。出漁から時間が経つのに帰ってこない、と漁業協同組合に家族から相談が寄せられ、捜索に出たところ、エンジンがかかった状態の船だけが発見された。釣りをしている時に何らかのアクシデントが起こり、落水したことが推察された。その後、漁協に所属する漁業者が皆、漁を休んで3日間遭難者の捜索に当たったという。残念ながらいまだ発見には至っていないとのことではあるが、漁業の街に助け合いの精神が深く浸透していることがうかがえる。

▲取材当日の師崎漁港。台風避難のため、ほとんどの船が港に戻っていた

▲港の向こうにはフェリー乗り場も。周辺の日間賀島や篠島に向けた定期便や観光船が運航されている

▲豊富な知識と冷静な判断力、統率力を兼ね備える副所長の手島安也さん

マリンレジャーの利用者も救難所として守っていく

伊勢湾にも三河湾にも面しているという地形的な特性から、近年、この地域は釣りのメッカとして注目を浴びている。土日には各地から釣り目当ての人が押し寄せるそうだ。車で簡易ボートやゴムボートを運んできて、無防備に海へ出てしまうケースも多いという。

「しかしこの海域は潮の流れが比較的速く、水深にムラがあるなどの特徴があります。特に師崎漁港を出た先にある師崎水道は難所として有名で、日間賀島付近は水深が浅くなり岩礁が広がる地形になっています。注意を促すための旗を立てているのですが、むかしから座礁事故が絶えないポイントです。冬季には北西風が強く吹くこともあり、転覆事故も度々起きています」師崎救難所の救助長である桂木繁功さんは言う。

去年もプレジャーボートが波にあおられ、転覆した事故が発生したという。「この時は、たまたま帰港途中にあった漁業者が転覆船に気づき、ボートの乗員を救助したことで事なきを得ました。けれど、周囲に誰もいない状況であれば乗員は流されて遭難してもおかしくなかった。危機一髪の救出劇だったと思います」手島さんは事故を振り返る。救助に当たった漁業者も、今回は運が良かった、と語ったそうだ。「事故を知って、こんな風の強い日によく海に出たな、と思いました」と桂木さんも言う。「海の状況よりも、自分の休みの日だから、といったことを優先する人がとても多い。地元の人間が、今日は風が出てきそうだからやめた方がいい、と声をかけてもなかなか聞き入れてもらえないのです」悩ましい問題です、と桂木さんはため息をついた。

また、漁業者が渥美外海に出た際、潮流により漂流したサーファーを救助することもよくあるという。「あの辺りは潮の流れがかなり速いので、気づいた時には戻れなくなってしまうんです。時には死亡事故につながりますから見捨ててはおけません」プレジャーボートやサーファーの事故はこれまで漁業者が自主的に救助を行ってきたが、今後は救難所が柱となって海の安全確保に取り組んでいきたい、と手島さんは抱負を語った。

▲師崎漁協総務課の課長でもあり、地域の状況を深く知る救助長の桂木繁功さん

地域への貢献を目指し、災害時への備えも想定

南知多町には鉄道が通っておらず、主要な交通機関は車。そのため、地震などの災害時は輸送の手段として船の存在がクローズアップされることが予想される。「南海トラフ地震のシミュレーションでは、この地域にも津波を始め大きな被害が生じることが予想されています。ですから、とても油断はできませんね。実際に昭和34年の伊勢湾台風の時は、漁船が物資を運んだり孤立した地域住民の救助を行いました。各地の救難所では救援物資輸送訓練を行っているところもあるようですね。私たちも、もしもの時に地域に貢献できるようそうした訓練を行い、水難救済会や各救難所とのネットワークも強化して、災害に備えていきたいと考えています」手島さんの目に強い光が宿った。

海の街に生きるものとして、地域の暮らしと海を楽しむ人の命を守る。熱い決意を胸に、師崎の海の男たちは救難所としての第一歩を踏み出していた。

▲師崎漁港から、伊勢湾へと出港していく船

全国
地方救難所のお膝元訪問

ニッポン港グルメ食遊記

各地の海の「旨いもの」をご紹介してきたこのコーナー。今回は、「名古屋港に面したマリーナにあるお洒落なスポットが人気」という情報をキャッチし、趣向を変えてお届けします。

海風に吹かれながら美食を愉しむ

海上レストラン
（愛知県海部郡飛鳥村）

名古屋港に面したマリーナ「グレートマリン」に、2013年夏、海上レストランがオープンした。「お客様はマリーナの利用者が多いですが、水上オートバイで名古屋港からアクセスして食事をしたり休憩を取ったりされる方もよく見かけます」とマネージャーの吉川友貴さん。近隣に水上オートバイをつけて陸上に上がれるポイントがあまりなく、便利だと利用者に喜ばれているそうだ。

伊勢湾で獲れたアナゴなどの海の幸から、カレーやパスタ、そばなどの麺類、かき氷まで幅広いメニューを取り揃えている。港の景色を眺めながら食事を楽しむひとときは、ここならではの贅沢な時間だ。この夏からは、屋外でバーベキューも食べられるようになったとのこと。心地よい潮風の中で肉や野菜を焼き、熱々をほおばるシーンをイメージするだけでワクワクする。

また、グレートマリンでは、海の日にコンサートやナイトクルージング、流しそうめん大会を行うなど、各種イベントを開催。プレジャーボートや水上オートバイを持っていない人も、海を間近に感じながら楽しめる場となっている。

早くも名古屋港の人気スポットになりつつあるこの海上レストラン、ぜひ一度は訪れてみたい。

（お問い合わせ）
Tel. 0567−55−2960
（ホームページURL）
http://www.tokaimarine.co.jp/food/food.html

他にはない開放感が魅力の海上レストランと、そこへ連なるシーデッキ

人懐こい笑顔で多くのお客様に親しまれる、マネージャーの吉川友貴さん

脂の乗ったアナゴを干物にして。この気前の良さにびっくり！

じゅうじゅうと焼ける様子を想像するだけでお腹が鳴りそうなバーベキューセット